研究情報 7

飼料用米向けの水稲新品種「いわいだわら」

水田作研究領域
福嶌　陽
FUKUSHIMA, Akira

現在、日本の畜産は、飼料の多くを海外からの輸入に依存しています。一方、米の消費量は年々減少しており、水稲の栽培が行われない水田が増えてきています。これまでは、空いている水田に、牧草やトウモロコシなどの飼料作物を栽培していました。しかし、土壌水分の高い水田で湿害に弱い牧草や飼料作物を安定して栽培するのは難しい状況にありました。そこで、食用米用の水稲品種を改良して、たくさんお米が収穫できる飼料用の水稲品種の育成を目指しました。

《「いわいだわら」の特性》

「いわいだわら」は大粒で早生多収の「奥羽飼394号」と極早生で多収の「奥羽飼395号」（後に飼料用品種「べこごのみ」として品種登録）を2004年に交配して、その後代の中から、早生・多収・大粒の系統を選抜して育成しました（写真）。「いわいだわら」の出穂期は「あきたこまち」より２日早い“早生”に属しますが、登熟期間が長いため、成熟期は「あきたこまち」より３日遅い“中生”に属します。このため、東北地域中部以南が栽培適地となります。育成地（秋田県大仙市）における「いわいだわら」の収量は、食用品種の「あきたこまち」より13%多く、飼料用多収品種の「ふくひびき」と同程度の多収となります（図１）。普及予定地の岩手県一関市大東地区においては、「いわいだわら」の収量は、「ふくひびき」より13%も多収となります。地域間で収量が異なる原因は明らかではありませんが、「いわいだわら」は安定して収量が高いという特徴があります。

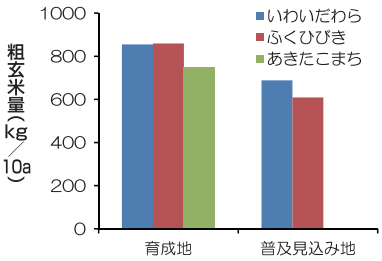

図１／秋田県大仙市（育成地）および岩手県一関市大東地区（普及見込み地）における「いわいだわら」の粗玄米収量

なお、飼料用米は、食用米と区別して収穫されますが、不注意で食用米と混ざってしまう危険があります。しかし、「いわいだわら」は、粒が大きく、また白濁するなど外観品質が悪いため、見た目で食用米と区別することができます（図２）。

いわいだわら　　あきたこまち

図２／「いわいだわら」の玄米

《注意点と今後》

「いわいだわら」は障害型耐冷性が弱いので、冷害の常襲地帯での栽培は避ける必要があります。また、温湯消毒および10℃以下の低温浸種によって出芽が不安定となることがあるので避ける必要があります。今後、「いわいだわら」は、安定多収の飼料用米向けの品種として、東北地域中南部に広く普及することを期待しています。

いわいだわら　　ふくひびき

写真／育成地（秋田県大仙市）における「いわいだわら」の草姿（2013年9月6日撮影）